

### 創作昔ばなし部門

## 満月の夜に

宮國 敏弘

「だいで、んきやーんぬ、ばなす。(どつてもむかしの話だよ。)」

サンゴの海に囲まれた、南の小さな島にマサリという漁師の若者が住んでおった。

マサリのお母はマサリが幼い頃に亡くなった。泣き虫だったマサリに添い寝して、よく子守唄を歌ってくれた優しいお母だった。

お父は村一番の漁の名人だったけれど、満月の夜、遭難した仲間の漁師を助けた後、行方がわからなくなっていたんだ。

漁師仲間の噂では、むこうに見える神島に渡る海で暴れ狂うマズムンに襲われたということだった。

「山のような大きなタコの化け物じゃー!」

「サバニを叩き壊し仲間を喰った!」

マズムンがいつ現れるかわからないので、漁に出るのも神島に渡るのも命がけのことだったんだ。

「ユヌス、いつか二人でマズムンを退治しよう!」

マサリには幼い頃からとても仲の良い友達がいた。昔、マサリのお父に助けられた漁師の息子、ユヌスだ。

「マサリ、お前のお父の仇だ。マサリが一緒ならおいらは勇気百倍だ!」

マサリとユヌス。動きで勇気ある二人の若い漁師は、「我達か、北極星(我らの希望)」と漁師仲間から頼りにされていたんだ。

「おい!」と顔を見合わせて怯えていたさあ。

赤く染まった海を見ていた神願おばあが言ったんだ。

「あれは、サンゴが卵を産んでるさあ。サンゴは生きてるんだよ。」

おばあのことばに皆は驚き、満月とサンゴの不思議な世界にうつりしていったんだ。

急に、ドドーン!

大きな音が響いて、砂浜がグラグラと波打って揺れた。入り江の水平線がサバザバサバと白い泡を吹きながら盛り上がり、山のような大波がドドドドッと村を飲み込む勢いで迫ってきた!

マズムンは勢いよく飛んできた。長い八本の腕を伸ばし、逃げ遅れた村人を次々と捕まえ、パクリパクリと喰っていった。入り江の中で暴れまわったマズムンはしばらくすると、

「ブオーン!」

と叫んで、満月を浮かべた赤い海に帰っていった。

村はずっかり悲しみにつつまれた。

半分の人々がマズムンに喰われたんだ。生き残った村人はみんな臆病になった。大人は漁に出るのを恐がった。子どもは外で遊ばなくなつた。みんなみんな家に閉じこもつた。

マズムンはまたきつとやって来る。

そんな恐ろしさでいっぱいだった。

海の底へ消えていった。

サバニに揺られていると、お母の優しい顔が浮かんできた。幼い頃、お母が歌ってくれた子守唄をマサリは思い出していた。

満月の夜に

サンゴが産まれる

坊やが寝ないと

海の底から

マズムンが食べにくる

ヨイヨイ、シーシーシー

マズムン来たなら

長鉗かまえて

目隠ししてやれ

喉を突いたら

世果報世がやってくる

ヨイヨイ、シーシーシー

(満月の夜、マズムンは目を覚まし暴れる。サンゴが産卵する大潮の夜だ。)

マサリは急いで櫂を漕いで帰った。



ある満月の大潮の夜のことだった。

潮を見に行ったマサリはいつもと違う外海の様子に驚いた。

数えきれない海猫がミヤミヤと海面で騒いでおった。群れの下の海は、でいこの花びらをまき散らしたようにだんだん真っ赤に染まっていく。一面赤い海はみるみる広がっていった。月明かりに誘われて入り江に集まっていた村人達は、「あがいたんでいー! うとうすむぬ! (ああ、なんて恐ろしい!)」

「びるますむぬ。うばいがうばい! (不思議なことだ。信じられない!)」

「ブオーン!」

大きな鳴き声が響いたかと思うと、荒波を立てて、入り江の沖に大タコのマズムンが姿を現した。

「ピンギレー(逃げる!) マズムンだあ!」

子どもを引きずりお父が叫ぶ。

赤ん坊を抱えてお母が走る。

腰の曲がったおじいさんが転ぶ。

杖をついたおばあさんも転ぶ。

泣き叫びながらみんなみんな逃げた。

それから長い月日が経ったある日、入り江で漁をしていたマサリのサバニに珍しい魚が近づいてきた。深い海底に棲むというリュウグウツカイ。額に深い傷を負っていた。

「マサリ、竜神様の遣いで来た。暴れ者のマズムンに竜宮の神もお怒りだ。お母の子守唄を思い出せ。お前がこの海の希望だ!」

それだけ伝えると、長い身体をくねらせてリュウグウツカイは

それから長い月日が経ったある日、入り江で漁をしていたマサリ

「さあ出て来い! マズムン!」

マサリとユヌスは立ち上がり、鉗を構えた。

大きな黒い陰が海底でユラリと動いた。

急に、サバザバサバと白い泡を吹きながら海面が盛り上がり、山のような大波がドドドドッと吹きあがったかと思うと、

「ブオーン!」

大きな鳴き声が響いた! 大タコのマズムンがギョロツとした目で海の底から姿を現した。

あつという間にサバニは木の葉のように吹き飛ばされ、マサリとユヌスは海に投げ飛ばされた。マズムンの大きな腕が二人の身体に巻きついてきた。身体がちぎれそうだった。気を失いそうだった。それでも、マサリもユヌスも鉗を離さなかった。

マズムンが大きな口をあけて二人を飲み込もうとしたその時、

「クヌシャク! (こいっめ!)」

マサリが鉗でマズムンの目を突いた。

「ブオー、ブオー、とマズムンは怒る。

「アララガマー! (なににくそ!)」

ユヌスが鉗でもうひとつの目を突いた。

「ブオー、ブオー、とマズムンは暴れる。

「クイシイ、トウズミ! (どつめだ!)」

マサリがマズムンの喉を力いっぱい突いた。

「ブオー、ブオー、とマズムンはまっ黒な墨を吐いて暴れ狂う。マサリとユヌスは激しい渦に巻き込まれ海の底深く沈んでいった。マズムンは海の中を狂ったように暴れまわり、

グルルルルル

と大きな叫び声をあげ、やがて黒い霧の塊になって竜巻のように天高く登っていった。

マサリが目を見ますと、入り江の砂浜に打ち上げられていたんだ。ユヌスも傍で気が付いた。月明かりの波打ちぎわを見ても、二人は驚いて顔を見合わせた。

「マズムンに食べられたはずの村の人達が笑顔で抱き合っていたんだ。」

「マサリ!」

呼ばれて振りかえると、お父が両手を広げて立っていたさあ。

「お父!」

マサリは泣きながらお父の胸に飛び込んだ。

「よくやった! マサリ。お母の子守唄をよく思い出してくれたな。」

顔を上げると、お父は額に深い傷を負っていた。マサリはすっかり分かったんだ。

(あの、リュウグウツカイはお父だったんだ。マズムンの呪いが解けたんだね。)

マサリとユヌスのおかげで、村人に笑顔が戻ってきたさあ。漁師達も恐がらずに漁に出るようになった。むこうに見える神島に渡る海も平和になった。サンゴの恵みを求めて魚もたくさん集まってきた。なにより、マズムンの呪いが解けた村のお父やお母、おじいやおばあ、子どもたちが、みんな元気で家族のもとに戻ってきたさあね。

そんなことがあってさ、この村ではね、満月が近づくと入り江の大潮の頃に、村人みんなが浜に集まるようになった。神願おばあを先頭に、神歌を唱えながら竜宮の神々に捧げ物をして、大漁と厄払の祈願をするようになったんだね。

そうそう、マサリとユヌスがさ、航海安全を祈って漁師達と「サバニ競漕」を始めたんだけどね、それが今では「御神パリー(奉納競漕)」としてこの島の伝統行事になっているんだって。

マサリとユヌスの魂が、ハリーーの鉗の音に乗って竜宮に届いているんだね。

とー、ういしい、んきやーんばなすあ、すまい。(はい、これで、昔ばなしはおしまいだよ。)

## 臨場感と映像化を意識

この度は権威ある児童文学賞正賞に選んでいただき、驚きと感謝で恐縮しております。

本作は、宮古方言をモチーフにした平易な語りの文体と、「静」と「動」の対比で繰り返



### 受賞者の言葉

されるテンポ良い展開に工夫を凝らしました。満月下の珊瑚の美しい産卵と暴れ狂い村人を襲うマズムンの対比。静寂の中、人喰いマズムン退治にサバニで沖に漕ぎ出す情景。命がけのマズムンとの壮絶な闘いの場面。聞き手の子どもたちが目を輝かせたそれまでそれからどうなっていくのか、臨場感と冒険譚になるよう、臨場感と

映像化を意識してセンチメンタルの伏線回収を後半のどんでん返しに設定することで子どもたちの笑顔と安心感に繋がられるよう幸せな終末を意識しました。

宮古島で生を受けた私の「記憶の底引き綱」に引く掛かる、子守唄、珊瑚の産卵、蛸のマズムン、リュウグウツカイ、自然への畏敬、風習、等々が子どもたちの夢や希望をはぐくむ一助になれば、こんな幸せなことはありません。